

---

# 大切なものの 翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大切なもの

### 【著者名】

翠

### 【あらすじ】

【新一×蘭×快斗】四名画事件で高木刑事がキッドだと気づいた  
蘭は……？

サイトに掲載している「〇二・秘めじと（ナンファンに謎の1  
〇〇のお題より）」の蘭サイドのお話です。

「おかしい……」

「どうしたの？ 蘭ねーちゃん」

コナンの声で、自分が思っていたことを口に出してしまっていたことに、蘭は気がついた。

蘭はコナンに気づかれないように、そつと深呼吸をして気持ちを落ち着けると、につこりと微笑んだ。

「ううん。なんでもないのよ。キッドは宝石ばかり狙っていたのに、どうして絵を盗んだんだろう、おかしいなあと思つただけよ。それに今回は殺人まで起こってしまったし……」

蘭は田の前で行われている、及川の記者会見に目をやつた。

「うん、そうだね。……絵が盗まれたことはともかく、殺人はキッズじゃないと思うよ」

その言葉に蘭が振り向くと、コナンは何もかもお見通しというような不敵な笑みを浮かべた。

「あら、どうしてそういう思うの？ 中森警部もそう言つていたけど」「中森警部と同じ理由だよ。アイツは人の命は取らない。……救うことにはあっても。そうでしょう？」蘭ねーちゃん

「こりと子供らしい無邪気な笑顔の向こうに、何もかも見透かしているかのような視線を感じた。そしてそれが新一のものであるかのような錯覚が蘭を襲い、また、新一に言えないでいる秘密を知られているような気がして、蘭は知らず自分を抱きしめていた。

「寒いの？ 蘭ねーちゃん大丈夫？」

心配そうに元の元気むきコナンの声に蘭はハッと我に返った。

「あ、うひ。大丈夫よ、ありがと」

コナンの安心したような顔を見て、蘭はじんわりと暖かいもので心が満たされいくのを感じた。

（なぜだらう、コナン君が笑つてると安心する……じぐわや口調のひとつひとつが新一に似ているからかな……）

「だから私は怪盗キッドにお願いしたい！ 今夜君が奪つた『青風』と義父の命を……返してくれとねー！」

及川の興奮して上ずつた大声がした。

蘭はその言葉を聞いて、無意識に服の上から携帯を握り締めた。

「帰るぞ！」

小五郎の声で、事件のことに心を奪われていた蘭は現実に引き戻され、あわててコナンの手を取ろうとしたが、コナンはいなくなっていた。

「え、あ、でも……コナン君が……わざきまでいたのに……」

「またかよ？ あのガキ……」

（ダメダメ、蘭。邪魔しちゃうかもしれないんだから……。それより、今はコナン君。きっと事件のこと調べて回つているんだわ！ ホント、新一そつくりなんだかひ……）

蘭は携帯を握り締めていた手を離し頭を振ると、コナンを探すべく走り出した。

「でも、おかしくありませんか？この別荘を機動隊が包囲してい  
たのに、誰も逃げる所を見てないなんて……」

蘭がコナンを連れて戻ると、高木達が事件について話し合つてい  
た。

高木の発言にコナンが同調し、それを受けて高木が我意を得たり  
とばかりにコナンに話をする。

蘭は、緊張で乾いた唇をぎゅっと噛み締め、高木の様子を注意深  
く見ながら口を開いた。

「のせないでくれます？」の子もひ寝るんですから……」  
「あ、はい……」

高木は蘭に、申し訳ないというような引きつった顔を見せてから、  
目暮に向き直りさらには事件について話し始めた。

その様子を蘭は瞳をそらすことなくじっと見詰めていた。

高木の言葉が皆の関心を集め、高木の手が生み出す簡単なマジ  
ックが皆を眞実に導く……。

蘭の、もの問うたげな視線に気がついたのか、高木の瞳が蘭を捉  
え、二人の視線が交差する。その瞬間、高木は先ほどまで手にして  
いたガラスのコップを落とした。

佐藤に注意され、あたふたとしながらコップを片付ける高木はい

つも通りだ。一人のかもしだす仲のよい雰囲気もいつも通り。

けれど、違う。

蘭はずっとひっかかっていた違和感の正体に気がついた。

(キッド……)

蘭はハツとしてコナンの様子を盗み見ると、コナンは高木達の様子を鋭い視線で見つめていた。

(私が気がついたのだから、コナン君も気づいたかもしれない……)  
蘭は、コナンとは違うアプローチで真実にたどり着いたとは思いもせず、高木からコナンを離した方が賢明とばかり、小さな名探偵を連れて帰ろうとしたが、既に彼の姿は消えていた。

事件について調べているのだと、危ないことには首を突っ込みないように注意しているのにと思ったが、とりあえず今すぐキッドの正体がわかつてしまつこともないと、蘭はコナンを心配する反面、安心もしていた。

蘭は複雑な胸の内を自嘲気味に振り返り、その一因である高木を一瞥してから、コナンを探すためその場を離れた。

「コナンを連れて戻るとすぐに小五郎が推理ショウを始め、何もかも及川が仕組んだことだとわかった。

蘭は、キッドの疑いが晴れたことにホッと胸をなでおろし、思わず高木を田で追う。すると、そつと現場から離れて行く高木と、そ

の後を追うコナンの姿が目に入った。

(やつぱりコナン君は気づいてる!)

蘭は慌てて一人を追おうとしたが、小五郎がいま目が覚めたとばかりに大きなあくびと伸びをして蘭の行く手を遮った。  
自分で犯人は及川さんだと黙っておいて、犯人が及川さんだということに驚いている小五郎を引きずつてコナンを探す。

どこかで、コナンがキッドの正体を暴いているのではないかと思うと、蘭は気が気ではなかつた。

元刑事であり、名探偵と讃れ高い毛利小五郎の娘であるにもかかわらず、『平成のルパン』とも『月下の奇術師』とも評されている、いわゆる『泥棒』である彼のことが、である。

「新一も、きっとコナン君みたいに、『キッドを捕まえてやる!』って瞳をキラキラさせながら言つんだろうな……」

蘭は、今どこにいるのかわからない幼なじみのことを思い出し、ふつと口元を緩めた。

そう。似ているのだ。

姿かたちは言つまでもなく、内面が。

蘭はつまく言い表すことが出来ないでいた。

彼らの外見は確かに似ている。それは、何度か新一に変装したキッドと共にいて気付くことが出来なかったことからもうかがい知れる。その時のキッドは多少髪型はいじっていたが、素顔で目の前に現れていたのだから。

だが、キッドことを知るにつれ、その性格の違いに『全然似ていない』という印象を持つようになる。

性格はまったく違つ。  
けれど、似ている……。

それが、蘭を混乱させていてのかもしれない。

大好きな幼なじみを応援する気持ち。  
大切な友人を応援する気持ち。

どちらも確かに蘭の中にあり、どちらも大切なものだから。

守りたい。

「コナン君？」

蘭は、コナンの声がもれてきた扉に手を伸ばし中をのぞこうとしたが、一瞬早く小五郎が扉を開いた。と同時に、何かが小五郎のベルトに命中し、ズボンをずらす。それに気を取られている間に煙幕が広がり、爆発音と共にキッドが窓から飛び立つていった。

「か、怪盗キッドー？」

思わず窓から身を乗り出して彼の安全を確認する。  
と、階下からかすかに物音がした。

( もしかして下にいる…。 )

蘭はとつせにいぶかしんでいるコナンの氣をそらすため、そしてキッドに聞かせるため、大声を出した。

「行こー 早くこの事を警察に知らせなきゃー。」

「う、うん……」

田畠達の元へ向かいつゝ間、コナンの手をぎゅっと握り、蘭は心の中で「めんね」と謝った。

そして、田畠やコナン達が話しあっている輪から離れて抜け出すと、携帯を取り出し、アドレス帳にある彼の名前を選択した。

(後書き)

サイトに掲載している「〇二・秘め」（「ナンファンファンエ」謎の1〇〇のお題よつ）」の蘭サイドのお話です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0141m/>

---

大切なもの

2010年10月10日01時06分発行